

古典教室第8回(10月4日) レジメ

(このレジメは、第8回予習用資料としてお届けしたものと同一のものです)

『空想から科学へ』(3)

第二章前半(62～84ページ6行)

ここは、史的唯物論の立場で、資本主義的生産様式がいかにして発展の段階から没落の段階に移行するか、すなわち、その生産諸関係が「生産諸力の発展の諸形態からその桎梏(しつこく)に一変」し、「社会革命の時期が始まる」か(『経済学批判・序言』)を解明した部分です。

この問題は、史的唯物論の問題提起に直接答える形式では、『資本論』第一部では十分に説明されていませんでした。エンゲルスは、『資本論』第一部をエンゲルスなりに読みこんで、ここで資本主義的生産様式の生成・発展から没落への過程の、史的唯物論の立場での解明をくわだてました。そういう部分として読んでほしいと思います。

(今回の講義では、前半で、エンゲルスの解明を読んだあと、後半で、マルクス自身が、『資本論』のなかで、同じ問題をどう解明しているかについて、説明する予定です。この部分は予習の対象ではありませんが、テキストは、この予習資料の後半に掲載しておきます。)

[1]

段落ごとの解説

1. 史的唯物論では、社会の変革の究極の原因をどこに求めるか? (62～63)
2. この点から現代の社会主義を見る。 (63)
3. 資本主義的生産様式の変革も、生産力と生産関係の衝突から。 (63～64)
4. この衝突とはどういうものか? (64)
5. 資本主義的生産の発展。小経営から社会的な生産に。 (64～65)
6. しかし、取得の形態は古い時代のまま、「商品生産の取得形態」にとどまっている。 (66～67)
7. 社会的生産と資本主義的取得との矛盾。 (67～69)
8. この矛盾の第一のあらわれ。プロレタリアートとブルジョアジーの対立。 (69～70)
9. 資本主義は「生産の無政府状態」が特徴。そこでは「競争の強制法則」が支配的に作用する。 (70～71)
10. 中世を振り返る。 (71～72)
11. 矛盾の第二のあらわれ。個々の工場での生産の組織化と社会全体での無政府状態との対立。 (72～74)

12. 資本主義的生産は、それに内在する矛盾の二つの現象形態のなかで運動する。社会的な生産の無政府状態が労働者階級の状態を悪化させる。(74〜76)
13. 生産の無政府状態が恐慌を周期的に生みだす。(76〜77)
14. 世界はこれまでに五回の恐慌を経験した。(77〜78)
15. 恐慌において経済的衝突は頂点に達し、生産様式は交換様式にたいして反逆する。(78)
16. 恐慌は、生産力が「社会的生産力としての性格」をもつことを承認するよう社会に迫る。(78〜80)
17. 生産力の反抗に対応するための資本の側の変化。株式会社からトラストへ。(80〜81)
18. トラスト。独占と計画的生産。(81)
19. 最後は国有化。(81〜82)
20. トラストや国有化は、ブルジョアジーがなくてもよいことを示すもの。(83)
21. トラストも国有化も資本主義の枠内での変化でしかないが、国有化のなかには、衝突の解決のための形式上の手段が姿をあらわしている。(83〜84)

〔ここで前半は終わる〕

〔II〕

生産力と生産関係の矛盾についてのマルクスの見解

この文章は、講義の後半部分で使うテキストです。予習の必要はありません。

(一) 恐慌の根拠について——『資本論』のなかの代表的な二つの文章。

☆『資本論』第三部第三篇第一五章から——

「資本主義的生産の眞の制限は、資本そのものである。というのは、資本とその自己増殖とが、生産の出発点および終結点として、生産の動機および目的として、現われる、ということである。生産は資本のためのものであって、その逆ではないということ、生産諸手段はたんに生産者たちの社会の生活条件を絶えず拡大するための手段なのではない、ということである。それゆえ生産者大衆の収奪と貧困化にもとづく資本価値の維持と増殖が、その内部でのみ運動することができる諸制限——このような諸制限は、資本が自分の目的を達成するために使用せざるをえない生産諸方法と、たえず衝突することになる。この生産諸方法とは、生産の無制限的な拡張に向かって、自己目的としての生産に向かって、労働の社会的生産諸力の無条件的な発展に向かって、突進するものである。手段——社会的生産諸力の無条件的な発展——は、現存資本の増殖という限られた目的とは、たえず衝突することになる。それゆえ、資本主義的生産様式が、物質的生産力を発展させ、かつこの生産力に照応する世界市場をつくり出すための歴史的な手段であるとすれば、この資本主義的生産様式は同時に、この

生産様式のこのような歴史的任務と、これに照応する社会的生産諸関係とのあいだの恒常的な矛盾なのである」。

『資本論』新日本新書版④四二六〜四二七ページ

☆『資本論』第三部第五篇から――

「価格変動や投機的取引などを度外視すれば」恐慌は、ただ、さまざまな生産部門の生産における不均衡からと、資本家たち自身の消費と彼らの蓄積とのあいだの不均衡からとでしか、説明されえないであろう。ところが、実際には、彼らの資本の補填は、その多くが、不生産的な諸階級の消費能力に依存しており、他方、労働者たちの消費能力は、一部は、労賃の諸法則によって、一部は、彼らが資本家階級のために利潤をもたらすように充用されうるかぎりにおいてしか充用されないということによって、制限されているのである。すべての現実の恐慌の究極の根拠は、依然としてつねに、一方では大衆の貧困、他方では生産諸力を、あたかも社会の絶対的消費能力がその限界をなしているかのように発展させようとする、資本主義的生産様式の衝動なのである」。

（同前④八三五ページ）[*]

*この文章は、エンゲルス編集の現行版によらず、マルクスの草稿原文によりました。両者の間には、若干の異同があります。

（二）資本主義的生産様式の没落の必然性——『資本論』第一部の結論的命題

（第七篇第二四章第七節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」から）

「この転化過程「自分の労働にもとづく小経営の、資本主義的生産による駆逐の過程——不破」が旧社会を深さと広がりから見て十分に分解させてしまえば、労働者がプロレタリアに転化され彼らの労働諸条件が資本に転化されてしまえば、資本主義的生産様式が自分の足で立つことになれば、ここに、労働のいっそうの社会化、および、土地その他の生産手段の社会的に利用される生産手段、したがって共同的生産手段へのいっそうの転化、それゆえ私的所有者のいっそうの収奪が、新しい形態をとる。いまや収奪されるべきものは、もはや自営的労働者ではなく、多くの労働者を搾取する資本家である」。

（『資本論』④一三〇五ページ）

「以下は、いまの段落に続く段落で、全体が行かえなしの一続きの文章をなしているのですが、読みやすくするため、不破の責任で、三つの段落に区切り、段落ごとの主題を示す小見出しをつけました。」

（1）資本の側の変化。

「こうした収奪は、資本主義的生産そのものの内在的諸法則の作用によって、諸資本の集中によってなすとげられる。一人ずつの資本家が多くの資本家を打ち滅ぼす。この集中、すなわち少数の資本家による多数の資本家の収奪と相並んで、ますます増大する規模での労働過程の協業的形態、科学の意識的な技術的応用、土地の計画的利用、労働手段の共同的にのみ使用されうる労働手段への転化、結合された社会的な労働の生産手段としてのその使用によるすべての生産手段の節約、世界市場の網のなかへのすべての

国民の編入、したがってまた資本主義体制の国際的性格が発展する」。

(同前 一三〇五〜六ページ)

(2) 労働者の側の発展。

「この転化過程のいっさいの利益を横奪し独占する大資本家の数が絶えず減少していくにつれて、貧困、抑圧、隷属、墮落、搾取の総量は増大するが、しかしまた、絶えず膨張するところの、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結合され組織される労働者階級の反抗もまた増大する」。

(同前 一三〇六ページ)

(3) 資本独占の桎梏化。資本主義的外被の粉碎

「資本独占は、それとともにまたそれのもとで開花したこの生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは調和しえなくなる一点に達する。この外被は粉碎される。資本主義的私的所有の吊鐘が鳴る。収奪者が収奪される」

(同前)。

□